羅什訳妙法蓮華経管見

望　月　海　淑

1　はじめに

羅什訳の妙法蓮華経があったればこそ、法華経にたいする信仰者が沢山に輩出され、沢山な人々を救ってきたことは論を待たないところである。中国から日本にかけての法華経にたいする注釈書といえば、妙法蓮華経にたいするものばかりであるという歴史が、それを証明しているのである。従ってそれについて兎角の論を展開しようとは思わないが、ただ一二、はたしてこれで良いのかという点、素晴らしい名訳であるという点について言及をしたいと思っているところである。

法華経を理解する上において、二処三会の説法だと昔からいわれてきている(1)。それは序品から法師品までの10章が前霊鷲山会・見宝塔品から属累品までの12章が虚空会、薬王菩薩本事品から巻末までの6章が後霊鷲山会、というものである。これは大変に便利な区分であるように思われるが、よく考えてみると大きな矛盾も存在する。近年の法華経の研究者によると、法華経は1時期にすべてが出来上がったものではなく、最低でも2度から3度の時期にわたって成立したものだ(2)、といわれている。その上、提婆達多品の問題もあるというわけで、二処三会の説法というのは、近年の法華経研究者の研究に目を背けるもので、普遍的な理解を得ることの出来ないものだ、といわざるを得ないと思われる。

そこで、これら近年の法華経研究者の成果の上にたって、もう一度、羅什訳の妙法蓮華経を基盤として、『正法華経』と『Saddharma-puṇḍrīka-sūtra』との対比において、見直して見ようとするものである。

2　虚空と訳された語

羅什訳の妙法蓮華経において2・3の例外を除いて虚空と訳されている梵文法華経の言葉は、おおむね ākāśa か antarīkṣa か vaihayāyasa の語である。この詳細については、すでに拙論の「法華経における虚空について」(3)に述べているところであるから、ここでは要点だけを述べておくことにする。

すなわち antarīkṣa について譬喩品の中で、釈尊が舎利弗に授記した時に、これを聞いた

四部衆や梵天王たちが歓喜踊躍し天華等を降らしたという場面で、

所散天衣住二虚空中一。（12上）

諸天衣物悉在虚空羅列而住。（75上）

divyāni-ca vastrāṇy upary antarīkṣe bhrāmayanti sma（67）[4]（天上の衣服を空の上に翻させた）

とあり、空 antarīkṣa を妙・正法華経ともに虚空と訳出している。

そして vaihayāsa について薬王菩薩本事品においては、一切衆生喜見菩薩が法華経によって三昧を得たので、法華経に供養をしようと思い苦行を願い三昧に入り、命終の後に化作し、日月浄明徳如来に供養をするといい、

坐二七宝之台一。上二昇虚空一高七多羅樹。（53下）

去地七刀経行虚空。（125下）

sapta-tāla-mātraṃ vaihāyasam abhyudgamya sapta-ratna-maye kūṭa agāre paryaṅ=kam ābhujya（343）（七ターラ樹の高さに空中を上り、七宝で作られた家の台に坐った）

とあり、妙・正法華経がともに虚空と訳出したものは、vaihāyasa の語であることを示している。尚、この語は見宝塔品と従地涌出品において、多宝塔が空に浮かんでいる様を示す時に、更に分別功徳品において、曼陀羅華が空中から降ったという場面で、この語は antarīkṣa と一諸に使用されており、それはおおむね虚空（見宝塔品では一箇所は空中と訳され、同じ品で一箇所は両経ともに訳がなく、従地涌出品で一箇所だけ正法華経は空中）と訳されている。又、薬王菩薩本事品の前掲の場面と妙音菩薩品と妙荘厳王本事品において使用されているが、それらは七宝台のある場面と、七多羅樹の高さを示す場面とにおいてのものである。一方、提婆達多品で文殊師利菩薩が海中から涌出し、霊鷲山に詣でたという一連の場面に於いて使用されているが、提婆達多品は羅什訳ではないので、今は対象から外しておく。

さらに ākāśa について見宝塔品は、釈尊が滅後の世においては法華経を説くことは難事であることを述べているが、その中でたとえ人あり

「手把二虚空一」（34上）

「捉尽於虚空」（104下）

「ākāśa-dhātuṃ yaḥ sarvām eka-muṣṭiṃ tu nikṣipet」（218）（すべての虚空世界を一把にして投げるとしても）

とあり、この ākāṣa を妙・正法華経ともに虚空と訳出している。そして、その虚空について、安楽行品の身安楽行の親近処を述べるところでは、

観下一切法空。如実相。不二顛倒一不レ動不レ退不レ転。如二虚空一無二所有性一。（37中）

観一切法皆為空無。如所住立已堕顛倒。所立正諦常住如法。専秉身心不動不揺。不退不転（107下）

sarva-dharmāñ śūnyān vyavalokayati yathāvat pratiṣṭhitān dharmān aviparita-sthāyino yathā-bhūta-sthitān acalān akampyān avivartyān aparivartān sadā-yathā-bhūta-sthitān ākāśa-svabhāvān nirukti-vyavahāra-vivarjitān（237）（一切法を空と観察する。存在するままに法はあり、不転倒であり、あるがままに存在し、不動で、動かされず、不退で、変化せず、常にあるがままに存在し、虚空の自性のようにあり、言葉の表現を離れ）

とあり、妙法華経が虚空と訳したものは ākāśa に対するもので、これを正法華経は如法と訳出している。何故に如法であるのかという点に関しては、その前後の文に鍵があるように思われる。すなわち一切法は空であり如実相であり所有の性なしといい、一切法は皆空無であり正諦で常に如法に住するといい、一切法を空と見、あるがままに存在し虚空の自性のようにあり、言葉の表現を離れるという時、それは単なる拡がりではなく空 śūnya と関わるものであることを示している、と思われるからである。このありようは、先の見宝塔品の場合とは基本的に相違していると見なければならない。

そこで、虚空と訳された前掲の三語について、それらがどのような内容を持っているのか、サンスクリットの辞典にさぐって見ることにする。

たとえば Edgerton の『Buddhist hybrid sanskrit dictionary』には、antarīkṣa について「of the atmosphere」（39）と示され、vaihāyasam については「in or into the air」（87）と示され、ākāśa については「region・place」としながら、それは śūnyatā と同意語である（513）ことを示している。又、荻原雲来編纂の『漢訳対照・梵和大辞典』には、antarīkṣa について空中・虚空（73）、vaihāyasam について虚空・空中（1286）、ākāśa について、虚・空・虚空・太虚空・空界（179）等の漢訳語を当てている。しかして、このような理解では、僅かに Edberton の辞典においての śūnyatā と同意語だという説示以外に格別な相違があるとは考えられない。

3　ākāśa と śūnyatā について

このような状況であるならば、直接に法華経の説示から考えて見なければならない。序品の中で、釈尊が眉間から光明を放って東方万八千の世界を照らし出したことで、衆生が疑惑を抱き弥勒菩薩がその疑いを代表して質問をしている説示があるが、そこには、菩薩は寂滅の法を説き無数の衆生を導くのだとして、

或見$_{丁}$菩薩　観$_{丙}$諸法性　無$_{レ}$有$_{二}$二相$_{一}$　猶如$_{乙}$虚空$_{甲}$（3中）

暁了観察　不秘悋法　滅除三事　寂等如空（65中）

nirīhakān dharma prajānamānā dvayaṃ pravṛttān khaga-tulya-ādṛśān（12）（空行

く鳥のように両者に偏らず nirīhakā な法を知って…）

と示されている。ここで妙法華経が虚空と訳し、正法華経が空と訳した語は nirīhakā という語であるが、この語は śūnytā と繋がるものである[5]、といわれており、しかも、この前文に dharmaṃ ca ke-cit pravadanti śāntaṃ（寂滅の法を知って）という説示があることから、生々流転を質とする佛教の基本理念を踏まえて、変易法としてのありようを示す思想を考えて見ると、何とも説示のしようがない広大無辺な拡がりである虚空として捉え、それが妙法華経の虚空の訳語になったのではなかろうか、正法華経の空の訳語もこのような理解の上に立つものであろう。すなわち、ākāśa という語は単に広大な拡がりと言うだけではなくて、佛教の基本理念の関わる内容を秘めているものではなかろうか、と思われる。

このような理解を強く示すものとして、薬草喩品がある。樹木の上に雨が降り、その同じ水を樹木は自分の能力に応じて吸収するのだとして、

究竟涅槃常寂滅相。終帰二於空一（19下）

入解脱味志于滅度。度諸未度究竟滅度。令至一土一同法味。到無恐懼使得解脱（83下）

nirvāṇa-paryavasānaṃ nitya-parinirvṛtam eka-bhūmikam ākāśa-gatikam adhimu=ktiṃ…（116）（究竟の涅槃、常の滅度を唯一の立場として、虚空に行くものと信解し…）

と説示している。究竟の滅度といい常の滅度といい、それを唯一の立場として ākāśa に行くことを信解するというのは、虚空は単なる広がりではなく佛教の教えに基づくことを信解することであろうとするならば、終に空に帰すという妙法華経の示す内容を受け止めることができるであろう。正法華経の恐懼なくという訳語も、空ということを体得する人の境地なのであろうか。何れにしろ ākāśa 虚空という語は、ここでは空と同様な内容を持ったものと知ることができるであろう。

先に述べた安楽行品の説示の内容も、このようなありように立つものだと思われるが、念のために安楽行品の先の説示に続く偈を見ると、そこには

観下一切法　皆無二所有一　猶如二虚空一　無レ有二堅固一…常住一相上（37下）

普観諸法　是一切法　猶如虚空　譬若虚無　等無堅固…諸法所処　無有常名　是為明者（108中）

api hi tān nirīkṣed ākāśa-bhūtān imi sarva-dharmān ‖ sadā pi ākāśa-samān asārakān aniñjitām manyana-varjitāṃś ca | sthitā hi dharmā imi nitya-kālaṃ…（240）（一切の法を虚空があるように観察すべきである。常に虚空と同じく不堅固で不動で妄想を離れ常の時に存在する…）

と説示されている。すなわち、一切法を観察すると、それは虚空のように所有なく堅固でなく人の想念を離れ常に存在するものであるというのであるが、これは明らかに虚空 ākāśa は、これであると示すことも、どんなものであるか説明することも一切出来ないものであり、しか

も如実に存在するものであることを意味するであろう。このような立場は、虚空 ākāśa のありようは何とも説明のしようがなく言示の相をこえたものであり、それ故に空 śūnyata に近いものであるものと思われる。

方便品の第102偈と103偈とにわたって示されている説示に

諸佛両足尊　知二法常無性一　佛種従レ縁起　是故説二一乘一　是法住二法位一　世間相常住（9中）

諸佛本浄　常行自然　此諸誼者　佛所開化　如両足尊　乃分別道　故暢斯教　一乘之誼　諸法定意（72上）

sthitikā hi eṣā sada dharma-netrī prakṛtiś ca dharmāṇa sadā prabhāsvarā | viditva buddhā dvi-padānam uttamā prakāśayiṣyant' imam eka-yānam || 102 ||

dharma-sthitāṃ dharma-niyāmatāṃ ca nitya-sthitāṃ loki imām akampyām | buddhāś ca bodhiṃ pṛthivīya maṇḍe prakāśayiṣyanti upāya-kauśalam || 103 ||（51）

（これら法眼は常にあり、法の本性は常に輝いている。最高の両足尊はこれを知って、一乘を説くであろう。法住法位にして、常にこの世にあり、不動なることを佛たちは知り、大地の座で方便を説くだろう）

とある。これによると、法といわれるものは常にこの世に存在するものであり、それは他のなにものによっても左右されないものであることが明白で[6]、そのために佛は唯一の佛乘を説いたのだ、ということであろうが、それは安楽行品等が説示する、śūnyata に近い意味を持つ虚空 ākāśa が、示そうとするものと通ずるものであると理解できるであろう。

4　従地涌出品での虚空

従地涌出品は他方来の菩薩等が、我々が佛滅後に法華経を説きましょうというのに対して、釈尊は「止善男子。」汝等が法華経を護持することをもちいずといい、この娑婆世界にはすでに六万恒河沙の菩薩等が用意されているのだと語って、地涌菩薩等を呼び出された説示が展開されている。そこには

先尽在二此娑婆世界之下。此界虚空中一住（40上）

在於地下摂護土界。人民道行倚斯忍界（110中）

ye 'syāṃ mahā-pṛthivyām adha ākāśa-dhātau viharanti sma imām eva Sahāṃ loka-dhātuṃ niśritya（253）（この娑婆世界に属する大地の下の虚空世界に住んでいた）

と説示されている。すなわちここでの虚空は ākāśa の語であるが、注意しなければならないのは、正法華経が今までの所とちがって「摂護土界」という訳語を使用しているということである。「摂護土界」と正法華経が訳出したのは何故なのか。これを探ってみるために、更に続

けて見ていくと、地涌菩薩等が出現し、多宝塔の釈迦・多宝の二佛の所に詣でる場面では

各詣二虚空七宝妙塔多宝如来釈迦牟尼佛所一（40上）

至忍世界悉住空中。見于滅度多宝世尊能仁大聖（110下）

sa mahā-ratna-stūpo vaihāyasam antarīkṣe sthito yasmin sa bhagavān Prabhū=taratnas tathāgato…bhagavatā Śākyamuninā tathāgatena（255）（空中にとどまっている大宝塔で、尊き多宝如来と尊き釈迦牟尼如来とが）

として、かの釈迦・多宝の二佛がおられた所は空中であることを示している。これは見宝塔品の説示の場面を引き継いだもので、多宝塔が浮かんだ場所のことであるから、当然な表現というべきであろう。

この場面で、地涌菩薩等は様々な讃法をもって二佛を瞻仰したが、それはとてつもなく長い時間であったが、佛の神力のために四衆には半日のことぐらいにしか感じられなかった。そして佛の神力によって四衆は、この地涌菩薩等が

見二諸菩薩遍一満無量百千萬億国土虚空一（40上）

得普見。又使念知此忍世界。諸菩薩衆於虚空中。各各摂護百千佛土（110下）

imām ca Sahāṃ loka-dhātuṃ śata-sahasr'ākāśa-parigṛhītāṃ bodhisattva-paripūr=ṇām adrākṣuḥ（256）（この娑婆世界が百千の虚空によって取り巻かれ、菩薩が満ち溢れているのが見えた）

と説示している。ここで注意すべきことは、娑婆世界が百千の虚空に取り巻かれたという表現である。今までいたところの空中の世界 vaihāyasam antarīkṣa が、いきなり虚空 ākāśa の世界へと表現を変えたというところである。妙法蓮華経ではほとんどのところで、此の二語を虚空と訳出しているので問題は感じられないのであるが、正・梵の両法華経を見ると、明らかに言葉が違っており、それ故にこそ、正法華経は摂護百千佛土との訳出をしたものと思われる。言い換えると、地涌菩薩に関わる説示では、その居場所が空中という可視的な空間から、虚空・摂護土界という不可視的な世界への転換が見られる、ということである。

かくて、この地涌菩薩等のリーダーとして、上行・無辺行・浄行・安立行の四菩薩であることが示され、この四菩薩等と釈尊との対話の後に、弥勒菩薩がすべての人々の疑問の念を代表して釈尊に質問をしている。そして他方の世界からきた釈尊の分身の諸佛たちも宝樹の下に坐ったが、その諸佛の侍者たちは各各、

見下是菩薩大衆。於二三千大千世界四方一従レ地踊出住中於虚空上（41上）

各各見諸菩薩無量大会部部変化。従地踊出（111下）

bodhisattva-gaṇaṃ bodhisattva-rāśiṃ dṛṣṭvā samantāt pṛthivī-vivarebhya unmajjantam ākāśa-dhātu-pratiṣṭhitaṃ（260）（菩薩の集団、沢山な菩薩があまねく大地の割れ目から涌きだして、虚空世界にとどまったのを見た）

地涌菩薩等が、虚空世界 ākāśa dhātu から涌出したことを見たことを示している。すなわち、地涌菩薩らは ākāśa 虚空の中に住んでいたことは明白であり、それは我々が自己の眼によって見ることができるという世界ではないこともあきらかである。

眼で見ることができないので、この人々はどのような人であるのか、何処から出てきたのか、と不思議に思ったのは当然なことであり、それ故にこそ釈尊にたいしての質問がなされている。この質問にたいする釈尊のお答えは、

於二是娑婆世界之下此界虚空中一住（41中）

処于下方而於其中（112上）

asyāṃ Sahāyāṃ loka-dhātāv adhastād ākāśa-dhātu-parigrahe prativasanti（262）

（この娑婆世界の下の方、虚空世界の場所に住んでいた）

となされて、地涌菩薩がおったのは娑婆世界の下の虚空世界であることを示している。ここでの正法華経にはその場所についての明示はないけれども、この長文に続いた偈に

在二娑婆世界　下方空中一住（41中）

在于下方　今日故来　摂護国土（112中）

vasanti ākāśa-parigrahe 'smin kṣetre 'sya heṣṭā paricāri vīrāḥ（263）（この勇士たちは、この国土の下の虚空に包まれた場所に住んでいた）

と示されているから、妙法華経の虚空・空中の訳語、正法華経の摂護国土の訳語は、ākāśa に対するものであり、さらにそれは虚空に包まれた parigraha 場所であることが分かる。したがってそれは、可視的な空間ではありえない。それを示すかのように、偈の最後の部分で

常好在二禅定一　為レ求二佛道一故　於二下空中一住（42上）

静行無為　如虚空界　悉無所著　禅定精進　為安住子（113上）

asaṅga-cārī pavane 'va santi ākāśa-dhātau satataṃ aniśritāḥ | janenti vīryaṃ sugatasya putrāḥ paryeṣamāṇā ima buddha-bhūmim（266・7）（風のように常に無所著で障碍なき行を虚空でなし、善男子らは佛の位を希求し精進する）

とあり、下の空中とは何であるのか、妙法華経の空中という妙な訳語があるけれども、それは ākāśa にたいするものであることは明白であるから、虚空世界と理解すべきもので、それは何者によっても妨げられるものではないことを意味しているであろう。

このような従地涌出品での地涌菩薩に関わる説示を見るとき、地涌菩薩の存在は可視的な世界を越えたもの、空の理念に通ずるもの、佛の覚の境地の世界のことであると理解しなければならないであろう。如来壽量品が冒頭において信解 śraddhā・adhimukuti を強調して、その上に立って六或示現を説き、すべての佛は久遠の釈尊の示現であることを展開し、久遠実成の佛身を説いているのであるが、これには虚空 ākāśa の展開が不可欠な要素であるといわなければならない。それがなければ久遠実成の本佛の存在は成り立たないであろう。してみると、

虚空会の説法と一言で片付けることには矛盾が感じられる、見宝塔品の説示は虚空会への入り口を示すものではあっても、虚空会そのものの説示とはいいえないと思われるのである。

以上の点から虚空会の説法という言葉の内容には再検討が必要なように思われる。すなわち、妙法華経の訳文によると同じ虚空会でありながら、見宝塔品と従地涌出品での地涌菩薩に関わる説示においては、antarīkṣa と ākāśa との違いがあり、前者は空中であり後者は虚空であるから、一様に虚空会の説法と片づけるべきではなく、虚空会の説法というのは地涌菩薩に関わる説法から始まるとなすべきであろう。

尚、分別功徳品・如来神力品において ākāśa の語が使用されているのであるが、これらは虚空が無辺にして広大なるものであることを語るものであり、その外はすべて antarīkṣa（vaihāyasa）に関わるものである。これらについては紙数の関係もあり割愛する[7]。

5　耆闍崛山と霊鷲山

妙法華経において耆闍崛山が語られているのは、序品（1下）と見宝塔品（33下）と分別功徳品（45中）と妙音菩薩品（55中下）と普賢菩薩勧発品（61上）とである。これについて梵文法華経にはすべて Gṛdhrakūṭa と説かれ、正法華経においては見宝塔品の耆闍崛山をのぞいて他はすべて霊鷲山と説かれている。例えばそれは

一時佛住王舍城耆闍崛山中。（1下）

一時佛遊王舍城霊鷲山。（63上）

ekasmin samaye buagavān Rājagṛhe viharati sma Gṛdhrakūṭe parvate（1）（ある時、世尊は王舍城のグリドラクータ山に住し）

という具合である。

ところが妙法華経の如来壽量品を見ると、そこには「俱出霊鷲山…常在霊鷲山」（43中。下）と示されている。これにたいして、正・梵の両法華経にはそれぞれ、「霊鷲之山」（114下）「ātmāna darśemy ahu Gṛdhrakūṭe」（私は自我をグリドラクータに現す）「na ca cyavāmī itu Gṛdhrakūṭāt」（276）（グリドラクータから動かない）というもので、正法華経は妙法華経と同じ訳であるが、梵文法華経は他の場面と同じ言葉を使用していることが分かる。言い換えると、正・梵の両法華経は他の場面と同じ語であるが、妙法華経だけは訳語をかえて意訳をしていることが分かる。

ここで意訳をなしたのには何の意味があるのか。耆闍崛山というのは梵文からの音訳であるから、それはインドに現存した実在の山の名前であることになる。gṛdhra というのは鳥の鷲のことであり、kūṭa はものの頂きのことで、それは山の頂き峰を意味するから鷲の峰ということになる。しかしてここでは霊という言葉に当てはまるものはない。でも何故に霊鷲山と訳

されたのだろうか。

如来壽量品を見ると、弥勒菩薩等の疑問に答えようとする形をとるために、釈尊は「汝等當レ信二解如来誠諦之語一」（42中）「悉當信佛誠諦至教。勿得猶豫」（113上）「avakalpayadhv=aṃ me kula-putrā abhiśraddadhadhvaṃ tathāgatasya bhūtāṃ vācaṃ vyāharataḥ」（268）（善男子よ、私を信頼せよ、如来のあるがままの語る言葉を信じよ）と語っている。ここに見ることのできる言葉の内容は、妙・正・梵の三経ともに同じ内容であると理解することが出来るが、このように釈尊が語ったことは、如来壽量品の説法は、今までの説法とは内容を異にすることを示し、聴聞者等にたいして心の転換を要求したものと受け止めるべきであろう。この心の転換の上に立たなければ、始成正覚の佛身そのままで、久遠実成の佛身を示すことは不可能な事柄だと思われるからである。

一心に佛を見たてまつらんと欲して自ら身命を惜しまず、ということは、佛の教えにたいしてひたすらにならなければならない、ことを意味している。このような状態に人々がなった時に、佛は衆僧をつれて霊鷲山に出現する、というのは時や場所を選ばず心のありようを選ぶことでなければならない。こう考えて見る時に、鳩摩羅什の訳語が生き生きとしてくる筈である。それ故にこそ、日蓮聖人は身延山にいながら、「教主釈尊の一大事の秘法を霊鷲山にして相伝し」[8]と言われ、自分の肉団の胸中に隠し持てりと言い切られたのであると思われる。

すなわち、ここでの鳩摩羅什訳の妙法華経は名訳と言うべきものである、と深く考えるところである[9]。

注

（1）例えば、宮崎英修編『日蓮辞典』188～9。

（2）例えば、布施浩岳『法華経成立史』、本田義英『法華経論』、鈴木宗忠『法華佛教』等。

（3）「法華経における虚空について」『佐々木孝憲博士古稀記念論文集・佛教学佛教史論集』197～220。

（4）この引用文は妙法華経・正法華経・Saddharma-puṇḍrīka-sūtram by Ogihara and Tsuchida 本の順で、（　）内の数字は頁数で、以下同じ。

（5）Edgerton の前掲書299。「often associated with śūnya」。

（6）坂本幸男・岩本裕訳注『法華経』上巻。342。

（7）拙論「法華経における虚空について」（『佐々木孝憲博士古稀記念論集』）を御覧願いたい。

（8）「昭和定本日蓮聖人遺文」第二巻1884。

（9）拙著『法華経における信と誓願の研究』254～294に詳しい。求む必見。